

駢文概説

鈴木虎雄先生講義

編輯部速記

駢文は支那の文學史の一面として研究を要するものである。

韓愈が「文起八代之衰」と云つたのは古文の立場からで、この時代は駢文の最も盛な時代であつた。我國との關係についてみると駢文の影響を受けて我が王朝代にはそれが盛に用ひられた。それは歴史に見える詔勅の中にある。八紘一字の詔書を始として、この文體を知らずしては到底解釋が出来ない。又「本朝文粹」などにある我國人の漢文の中には此の體の文が多くある。國文學に於ける戰記文・謡曲・和歌等にもこの文體に關係のあるものがあらう。それ故我國の過去を知るにもこの文體のことは心得ておくべきものとおもふ。

この文體は美文學の極致であつて、そこに重要な價值があり、將來の利用價值がまたそこにあると思ふ。萬葉歌人等は支那文學に精通し、それをよく消化して、其の痕跡を些かも残さず、然かも其の精髓をよく言ひ表してゐる。別に駢文の美辭麗句を並べてゐるわけではない。この様な消化して應用するといふ方法は注意すべきである。

さて予は駢文を概説するに當り、次の項目の順序によつて述べよう。

一、意義

二、具有諸條件

三、各部全體の調和

四、駢散合一説を論ず

第一章 駢文の意義及びその包括する内容

或る事物の名稱は必要から生じて必ず一定の意義を有するものである。所がその名稱の持つ眞の意義が理解されずして人によつてその解を異にすることがある。一例を挙げれば、六朝時代に文・筆と云ふ稱へ方がある。

梁劉勰の文心雕龍、總術篇に

宋顔延之以爲、筆之爲體、言之文也、經典則言而非筆、傳記則筆而非言

と云つてゐる。顔延之の言は何處にあるか今日は不明であるが、言之文即ち言葉のあやのあるものを筆だと見做してゐる。この顔延之の筆の意義は當時一般の筆の意義よりも廣いと思はれる。劉勰はこれを駁して

易ノ文言ハ言ノ文ナルモノナリ、筆ヲ以テ言ノ文ナルモノトナセバ、經典ハ筆ニ非ズト云フヲ得ズと言ひ、又

今之常言、有文有筆、以爲無韻者筆也、有韻者文也。

と云つてゐるところを見ると、韻をふまないものが筆、韻をふむものが文と云ふのが當時の常言であると共に、劉勰の持説であつた。

清の阮元の文韻説に、沈約の説を引いて、

韻ハ押脚ニ限ラズ、句中ニテモ之アルモノナリ

と説いてゐるが、これは阮元の一家言である。

私は筆は單に無韻の文章、今の一般の散文を指すものではなくして、當時の駢儷（四六文）文を指すものと思ふ。

任筆沈詩（南史任昉傳）

竣得臣筆、測得臣文、（南史顏延之傳）

これによると文は有韻の文を云ひ筆は駢儷文を指すものと思はれる。故に顏延之の「筆は言の文なるもの、傳記は筆にして言にあらず」と云ふのと合はせ見る時に、文と筆との關係を考へてみると言の文飾ありて有韻のものを文と言ふのであらうと思はれる。

今こゝに述べる駢體の性質は如何と云ふに、この名稱は唐代に起つたかと思はれる。

自秦迄隋、其體遞變、而文無異名、自唐以來、始有古文之名、而目六朝之文、爲駢儷、而爲其學者、亦自以爲與古文殊路（李兆洛駢體文鈔序）

駢四儷六、錦心繡口（唐柳宗元乞巧文）

……作三十卷、喚曰變南四六、（李商隱樊南甲集序）

四六之名、六博格五、四數六甲之取也（同上）

これらによると、中晚唐に四六駢儷の名があつたことが明らかである。これらは狹義の駢文である。廣義よりすれば、駢

は二つの馬を並べるの意、故に苟も對句を用ひるものは凡てこれを駢文と云ふことが出来る。それ故近代の支那人學者の駢文と稱するものは廣い範圍で、その標準が不明瞭である。中には昔は駢散不分であつたと云ふ考を持つてゐる者もある。

文有_二駢散_一、如下_下樹之有_二枝幹_一、草之有_二花萼_一、初無_二彼此之別_一、所_レ可_レ言者、一以_レ理爲_レ宗、一以_レ辭爲_レ主、且夫理未_レ嘗不_レ藉_二乎辭_一、辭亦未_レ嘗能外_二乎理_一、而偏勝之弊遂至_二兩岐_一、（清劉開與王子卿太守論駢體書）

文之體、至_二六代_一而其變盡矣、沿_二其流_一、極而_レ汙_レ之、以至_二乎其源_一、則其所_レ出者一也、吾甚惜_下夫岐_二奇偶_一而_二之者_一之毗_レ於陰陽_上也、毗_レ陽則躁剽、毗_レ陰則沈腿、理所_二必至_一也、於_二相雜迭用之旨_一、均無_レ當也、（李兆洛駢體文鈔序、注毗附也）

これは駢文の理想論としては可であるが、歴史的事實として見ると必ずしも當つてゐない。彼等は「駢散は合一すべきものなり」と云ふのと、「駢散は合一なるものなり。」とを混同してゐるやうである。駢散合一は知行合一と云ふ言ひ方と同じで、合一であるべしと云ふ言ひ方は分離してゐる事を示すものである。彼等の駢散の區別の曖昧な事は怪しむに足りぬ。

梁の蕭統の「文選」は駢散未分の文より駢文までを採り、その採否は能文・篇什・翰藻を以つて標準としてゐる。清朝になつてからは古文辭と稱して、辭賦・贊・頌・銘を加へてゐるものがある。編纂者は姚鼐である。陳均の唐駢體文鈔には賦を加へ、李兆洛の駢體文鈔は辭賦を省いてゐる。王先謙の駢文類纂には司馬遷の報任安書を書説の中に列し、李兆洛は書の部に列してゐる。辭賦を駢文に入れるのは有韻の爲か、それとも相似の爲か明瞭でないが、實例に例れば辭賦に駢體の多きが故と思はれる。銘は李氏は上編に銘刻類を設けた秦の李斯の諸刻石の銘を收めてゐるがこれらの大多數は殆ど單句から出來てゐて、偶句のものは寥寥數ふるに足りぬ位である。然るにこれに駢文の文字を冠してゐるのは何故か了解に苦しむので

る。

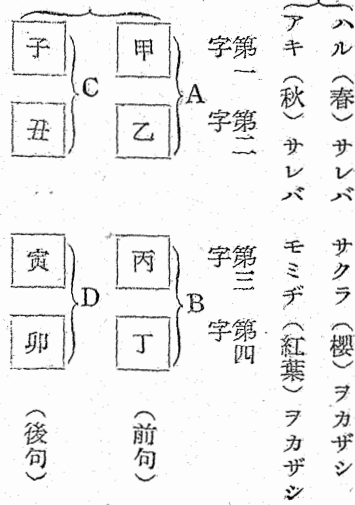
其他の諸家の撰も實例について何故に駢文とし又古文とするかを一々説明してゐないから臆測に止まり、明確な解釋を得ることが出来ない。故に私の見る所を以つて駢文の性質を定めようと思ふ。

散文の名は韻文に對して言ふ事がある。それは押韻しない文である。駢文と對して散文と云ふ時は對句を用ひないものが散文であつて、押韻には關係しない。駢文の全貌は後説より明らかであるが、大要散文は單句をその主要部分とする文章であり、駢文は對句——甲乙兩句に於て各品詞と品詞とを相對立した部分に配置したもの——を主要部分とする文章である。それ故散文中僅かな對句があつても其を主要部分としないものは散文であり、駢文中、單句があつても其を主要部分としないものは駢文である。

有韻文（辭賦を含む）はその中に駢體があり得る。殊に賦、祭文に於て然りである。然しこゝに取扱はうとする駢文は辭・賦・祭文を包含しない。例へば、孔稚圭の北山移文等は移檄中に收められてゐるが、明王志堅の四六法海に收めてあるものは韻をふむ故辭として取扱はれてゐる。駢文から辭・賦・祭文を除くのはそれが駢文でないからではなく、便宜上からである。

私の取扱ふ駢文は不押韻のものを指し、一種の散文であるが、韻文に類似してゐる所もある。何故ならば、對句は一定の字數の間に行はれ無制限の字數の中に行はれるのではない。一句の字數に制限——三字、六字——がある事は韻文的性質を帯びさせることである。和歌の五字七字は押韻はないがこれと似た結果を生ずる様なものである。ましてその制限された字數に平仄の規則を當てはめるのであるから、益々韻文的となるのである。

駢文は對句を主要部分となし對句中の或字は音韻の變化を整へて音調の快美を計り得るのである。かくの如くなし得るわけは、漢文特有の性質にある。即ち漢字は象形・指事・會意・諧聲の製字法により、常に心・耳に美的感情を起させるに適してゐる上に、一字一音であるからである。一語は一字で足り、その字音は複綴でなくして單綴である。一語が複綴の他國語では、同じ語數を對立させて對句にしようとしても、必ずしも出来る事ではない。



ハル(春) サレバ サクラ(櫻) ヲカザシ
 アキ(秋) サレバ モミヂ(紅葉) ヲカザシ

の如く字句の音調も同字數を以て出来てゐる對句——前圖の如き——の如く、A B C Dの調にする事も他の調にする事も自由出来るのである。

第二章 駢文の具有する諸條件

駢文は對句を主要部分とする文體と言つたが、それは概略であつて不完全である。更に、(一)字句の整齊、(二)對偶の精切、(三)聲律の諧調、(四)典故の利用、(五)修辭の巧美等の諸條件を具備する事を要する。

(一) 字句の整齊

散文は字句に制限なく、全く自由に、如何なる字句を用ひても差支ない。併し、文章の發達進化により、自然或種の句法が生ずる。戰國末より此の傾向が著しくなつた。——長句相對・雙關法・股法、——此の傾向が漢代となつて賦の發達により、無制限句は制限句となり、三四五六七字句となり、就中三四字句が主要な句となり、散文的な自由な句法は文意の展開・連絡・收束に必要な場合にのみ用ひられる様になつた。司馬相如封禪頌序「書曰元首然哉」……「施尊名」は三四五六七字句が主になり、對字は正ではないが度々此を使用してゐる。字句の整齊が更に進み、四字句六字句が文の主要部になれば純粹の四六體が生れるに至る。

(二) 聲律の諧調

文學的作品の聲律については古來その諧調を得てゐるものがある。それは偶然無意識に得たものである。意識的にその諧調を計つたのは晋の陸機に始まり、音韻論起つて以後の事である。それも多くの詩篇についてであるが文章にも通ずる。齊梁の音韻說代表者は沈約である。

若夫敷_レ枉論_レ心、商_二權前藻_一、工拙之數、如_レ有_レ可言、夫五色相宜、八音協暢、由_二乎玄黃律呂_一、各適_二物宜_一、欲_レ使_二宮羽相變_一、低昂舛_レ節、若前有_二浮聲_一、則後須_二切響_一、一簡之內、音韻盡殊、兩句之中、輕重悉異、妙達_二此旨_一、始可_レ言_レ文、至_二於先士茂製_一、諷高_二歷賞_一……並直舉_二胸臆_一、非_レ傍_二詩史_一、正以_二音律調韻_一、取_二高前式_一、自_二靈均_一以來、多歷_二年代_一、

雖「文體稍精」、而此祕未「覩」、至於高言妙句、音韻天成、皆暗與「理合」、匪由「思至」、張蔡曹王、皆無「先覺」、潘陸顏謝、去「之彌遠」、世之知音者、有「以得」之。（沈約、宋書謝靈運傳）

此は前後兩句間に異つた種類の音韻を排列し、その變化の中に諧調を求めることをいうたものである。この原則の應用は四聲八病の説となり、詩の形式では律詩を生じた。文章にも適用される。聲律を四六文に適用するに重要視されるのは句末の文字である。二句對をなすには甲乙兩句の末字を異つた聲にする。四句の間に行はれるものは、各句の句末は順次に平仄仄平、又は仄平平仄とちがふ様に並べてゆく。文章に於ける音韻の適用につき、沈約の説に對して阮元は一種の説をなしてゐる。——文韻説、文言説。

「梁時文筆ノ別アリ、無韻ヲ筆トイヒ、有韻ヲ文トイフ、然レドモ所謂韻トハ押脚ノ韻ヲ指スト共ニ又兼ネテ章句中ノ音韻ヲモ指ス章句中ノ音韻トハ古人ノ所謂宮羽ニシテ、今人言フ所ノ平仄ナリ。沈約ガ文ニツイテ説ケル韻不韻ハ章句中ノ音韻ヲ言フモノニシテ、句末ノ押韻ニ非ズ。四六文ノ平仄ハ章句中ニ於テ論ジ、押脚韻ハ之アラズ。而モ四六ハ則チ有韻文ノ極致ニシテ、コレヲ無韻ノ文トイラコトヲ得ズ（阮元の考によれば四六文は文となる）但沈約ハ音韻ニウキテ之ヲ自己ノ創獲ナル如ク云フモ、ソハ彼ノ音韻ハ意匠ヨリ出タルニ、漢魏ノ音韻ハ無心ニ暗合セシトイフニ外ナラザルナリ。然レドモ漢魏以來ノ音韻モ本源ニ溯レバ經書ヨリ出ヅ。孔子ノ易文言ト子夏ノ詩序ノ如キハソノ實例ナリ。……詩序ニ、情發於聲、聲成レ文、謂ニ之音。又、主レ文而詭譎。鄭玄は次ノ如ク解ス、聲、謂ニ宮商角徵羽也。聲成文者、宮商上下相應。主文、主レ與ニ樂之宮商相應也。コレ子夏ハ詩ノ聲音ヲ指シテ之ヲ文ト云フナリ。翰藻ヲ指サザルナリ。孔子ノ文言ノ義モコレニヨリテ明ナリ。文言・繫辭モ奇偶相生ジテ聲音アリ、嗟歎以テ文ヲ成スモノナリ。聲音即チ韻ナリ。スベテコレヲ論ズレバ、凡

ソ文トハ聲ニアツテハ宮商トナシ、即チ文言ノ雲龍風虎ノ一節、コレハ宮商角徵羽ノ祖ナリ。非一朝一夕之故ハ千古嗟歎ヲナスノ祖、詩序ノ聲音ノ一節ハ千古聲韻性情排偶ノ祖ナリ、故ニ我ハ言フ、韻トハ即チ聲音ナリ、聲音トハ即チ文ナリト。然ラバ即チ今人ノ便トスル所ノ單行ノ文、ソノ輿折放奔放ヲ極ムルモノハ乃チ古ノ筆ニシテ古ノ文ニ非ザルナリ。沈約ノ説ハ或ハ横ニ指シテ、八代之衰體、ト爲スベケンモ、孔子子夏ノ文體豈復衰ナルモノナランヤ。」と。

私の解は異なる。彼の孔子・子夏を假りて韻文に價值を添へんとするが如き態度は老獺の氣味がある。只、彼の、章句中にも聲韻があると云ふのは道理であらう。又、彼は言を文にする目的を説いて、音調を諧へて記誦に易からしむるにあり、と考へ、この目的の爲に協音偶句も起ると言つてゐる。ここに記誦に易しといふのは尤もである。但、四六體の如きものに至つては、必ずしも記憶に便せんとするには非ずして、寧ろ宣讀に便にせんとしたものであらう。故に實用を伴ふものにも、この體は用ひられたのである。宋謝偃「四六談塵」によれば、宣讀は限られたる字句で聲律諧調あるのが最も便であると。

四六施於制誥表奏文檄、本以便於宣讀、多以四字六字爲句。宣和間、多用全文長句爲對、習尚之久、至令未能全變、前輩無此體也。(四六談塵)

尙聲律については、沈約の説と、文心雕龍聲律篇とを參看すべきである。

余は茲に更に釋空海の文鏡祕府論と文筆眼心抄とによつて、具體的に文筆と聲律との關係を述べようと思ふ。文筆の聲律は詩の八病説と關係がある。詩と殆ど同じ理論は文筆でも應用される。齊梁間の文學者が字音の調子に四聲ありと考へて、その四聲ある字音相互の關係に双聲疊韻があるのを發見し、字句の排列の際に或種の双聲となり疊韻となるが如き場合を回避せんとして生じたのが所謂詩の八病である。四六に於て調子を害する八病は文筆に於ても同じであるのは明かである。而

して詩及び文と筆とは、その字句の形式が異なる故、不諧調の音聲は避ける道理は通ずるも實施の形式は差がある。八病について。

第一、平頭。

「平頭詩者、五言詩第一字不得與第六字同聲、第二字不得與第七字同聲。」文に關しては、祕府論に、「四言七言及詩賦頌、以第一句首字第二句首字不得同聲。不復拘以字數次第。如曹植洛神賦云榮曜秋菊、華茂春松、是也。銘誄之病一同此式。」榮・華・平聲。曜・茂・去聲。首字とは上二字と解すべきであるらしい。

筆の例は、

開金繩之寶曆。

鉤玉鏡之珍符。

此は得の例。但、開金・鉤玉について言つたのか、金繩・玉鏡について言つたのか不明。

嵩巖與華房送遊。

靈漿與醇醪俱別。(虎案別疑列訛)

此は失の例。嵩巖・靈漿は明かに失である。

第二、上尾。

「上尾詩者、五言詩中第五字不得與第十字同聲。」但、連韻の場合には病となさず。文筆の場合には、祕府論に、

或曰、其賦以第一句末不得與第二句末同聲、如張休明芙蓉賦云、潛靈根於玄泉、擢英耀於青波。是也。蔡伯喈琴頌云、青雀西飛、別鶴東翔、飲馬長城、楚曲明光。是也。其銘誄等、亦不異此耳。

先例の泉、波。後の城・光は互に平聲、犯せるなり。

又曰、其手筆第一句末、犯第二句末、最須避之。

例、薄氷凝池。

非登朝之珍。(東哲表)

池・珍・平聲。犯。

祕府論、眼心抄には次の例を筆の得たものとしてゐる。

玄英戒律^ハ

繁陰結序 本作疾

地卷朔風

天飛隴雪^リ

律と序、風と雪は互に異聲である。又、いふ。

凡詩賦之體、悉以第二句末與第四句末、以爲韻端、若諸雜筆不束以韻者、其第二句末、即不得與第四句末同聲、俗呼爲隔句上尾、必不得犯之、如魏文帝與吳質書曰、

同乘共載(第一句) 文選、共作並。

北遊后園(第二句) 同 北作以。

輿輪徐動(第三句)

賓從無聲(第四句) 同 賓作參。

清風夜起(第五句)

悲婉微吟(第六句)

是也。劉滔(案、滔字當從糸)云、『下句之末、文章之韻、手筆之樞要、在文、不可奪韻、在筆、不可奪聲、且筆之兩句、比文之一句、文事三句之内、筆事六句之中、第二第四第六、此六句之末、不宜相犯。』此卽是也。

と。

第二句の園、第四句の聲、第六句の吟は共に平聲、上尾の病を犯す。此を隔句上尾といふ。

文は有韻故第二句で意義完結し、第四句で意義が又完結する。無韻のものは吸氣、有韻のものは呼氣の如く、呼氣毎に一吸する様なものである。此の押韻の關係は、一の韻が始まつて次の韻が来るまでの間、二から四までの三句間に行はれる。故にこの事を指して「文事三句之内」としたのか。但、第二句の押韻は第一句を假定しなければ不能であつて、三句と數へるのは稍無理である。よつて余は、三句之内の三が、或は四の誤ではないかと思ふ。四の字は古書では三と書く例が往々あり、従つて三と四と誤る場合もあり得るのである。

筆の場合は、四字の隔對の場合を取つて説明しよう。第一句——第三句、第二句——第四句に對するのである。この時、第二句末と第四句末とは異聲であつて、第二と第六句末は異聲であるのを正格とする。これが第二句末と第六句末との關係は

即ち六句間の關係である。故に、筆事六句之中、と言つたのである。文では甲乙兩句あれば、意義は一旦完結する。筆では、甲乙の一聯四句あつて意義は一旦完結する。此が、文の兩句は筆の四句と相當するものである。兩者の割合は、筆之兩句、比文之一句、と言ひ得る所以である。祕府論引例の

善談天者 必徵象於人

工言古者 必考績於今

(宋・鮑照・河清頌序)

是人、今共に平聲、隔句上尾、此の筆の四句は文の二句に當る。

又、此の法則をおし廣めて、順次に病を避けて、第四句末は第六句末と同聲なるを得ず、第六句末は第八句末と同聲なるを得ずとなす。第四句末が第八句末と同聲なる時には、之を脊發又は踏發聲といふ。説明に、

凡筆家、四句之末、要會之所歸、若同聲、有似脊(尾)而機發、故名脊發者也。

別の條に、「尾を脊みて機發す」の句あり。脱せるか？

例。鍾儀戀楚(第一句) 樂操南者(第二句)

東平思漢(第三句) 松柏西靡(第四句)

仲尼去魯(第五句) 命云遲遲(第六句)

季后過豐(第七句) 潛焉出涕(第八句)

(任孝恭書)

聚穀積寶（第一句） 非惠公所務（第二句）

記惡遺善（第三句） 非文子所談（第四句）

陰蚪陽馬（第五句） 非原室蚪樺（第六句）

土山漸臺（第七句） 非顏家所營（第八句）

靡と涕と、談と營と、沓發聲。

但、上四句末と下四句の初との間に、既而、於是、斯皆所以、是故等の語あれば、踏發の病は之を犯しても損することなし。

第三、蜂腰。

蜂腰詩者、五言詩一句之中、第二字不得與第五字同聲。言兩頭麤、中央細、似蜂腰也。

今、二字と三字に分けると、○○○○○○この第二字と第五字とが同聲なるべからずと云ふのである。祕府論に、

劉氏曰……此是一句之中上尾、爲其同分句之末也。沈氏云、五言詩中分爲兩句、上二下三、凡至末句、並須要殺。

文筆に關しては、祕府論に、

諸賦頌皆須以情斟酌避之。如阮瑀止慾賦云、

思在體爲素粉

悲隨衣以消除

卽體與粉、衣與除同聲、是也。

筆では、四、六、七、八言で犯した場合のみの例をあげよう。

揚雄甘泉 (四言句)

美化行乎江漢 (六言句)

三仁殊途而同歸 (七言句)

潤草沾蘭者之謂雨 (八言句)

雄—泉、化—漢、仁—歸、草—雨。互に同聲。

第四、鶴膝。

鶴膝詩者、五言詩第五字、不得與第十五字同聲、言兩頭細、中央麤、似鶴膝也。

文筆の例は、

陸植紫房 (第一句) 文選、續作摘。

水挂鱣鯉 (第二句)

或宴于林 (第三句)

或禊于汜 (第四句)

(潘安仁、閒居賦)

房・林同聲・犯。

其諸手筆、第一句末不得犯第三句末、其第三句末、復不得犯第五句末、皆須鱗次避之。溫・邢・魏諸公及江東才子、每

作手筆、多不避此聲、故溫公爲廣陽王碑云。

少挺神姿（第一句）

幼標令望（第二句）

顯譽羊車（第三句）

稱奇虎檻（第四句）

此は故に犯したものである。此等は聲律を調へる事を目的としてゐない。

其詩賦銘誄、言有定數、韻無盈縮、必不得犯、……自余手筆、或賒或促、任意縱容、不避此聲、未爲心腹之病。

「又今世筆體、第四句末、不得與第八句末同聲。俗呼爲踴發聲、譬如機關鎗尾、而頭發、以其軒輊不平故也。若不犯此病、謂之施虛聲、卽是不朽之成式耳。

又祕府論に鶴膝の得失の例を擧げてゐる。

魁梧長者

莫非其舊

風謠歌儷

各附其俗

（左思三都賦序）

定州

跨躡夷阻(一) 領袖簪維(三) 跼神岳以鎮地(三) 疏名川以連海(四) 原隰龍鱗(五) 班頌何其陋(六) 桑麻條暢(七) 潘賦不足言(八)

阻、平聲。地、去聲。鱗、平聲。暢、去聲。得、

璇玉致美(一) 不爲池隍之用(三) 桂椒信好(三) 而非園林之飾(四) 西郊不雨(五) 彌迴天看(六) 東作未理(七) 卽勳皇情

(八)

美、好、共に上聲。失。

空海は故意に鶴膝を犯したものを舉げてゐる。

凡筆冢、四句之末要會之所歸、若同聲、有似齊而機發者也、若其間際有語隔之者、犯亦無損、若手筆、得故犯、但四聲中安平聲者、益辭體有力。

能短能長(一) 既成章於雲表(二) 明吉明凶(三) 亦引氣於蓮上(四) 魏收赤雀頌序

長、凶、共に平聲。

只彼は斯様なものを以て常例としてゐるのではない。其について彼は、「其鶴膝、近代詞人、或有犯者。尋其所犯、多是平聲。」(近代とは六朝を指す。)其例として。

竝寂漠銷沈(一) 荒涼磨滅(三) 言談者空知其名(三) 經過者不識其地(四) 溫子昇寒陵山碑序

沈、名、平聲。

楊氏八公(一) 歷兩都而後盛(三) 荀族十卿(三) 終一晉而方踐(四) 刑子才 高季式碑序

公、卿、平聲。

九野區分(一) 四遊定判(二) 賦命所甄(三) 義兼星象(四) 魏收 文宣謚議
分、甄、平聲。

彼又曰、「文人劉善經云、筆之鶴膝、平聲犯者蓋文體有力、豈其然乎、此可時復有之、不可得爲常也。
第五、大韻。

「大韻詩者、五言詩若以新爲韻、上九字中、更不得安人津陵身陳等字、既同其類、名犯大韻。

□ □ □ □ □

□ □ □ □ □ 甲韻

第十字に甲韻を置けば上九字に甲韻に屬する字を置いてはならない。換言すれば位置を隔てて甲韻と疊韻の字を避ける事を意味する。祕府論に空海元氏の説を引く、「元氏曰、此病不足累文、如能避者彌佳、若立字要切、於文調暢不可移者、不須避之。

(元氏は唐元競)

筆に在つては文鏡祕府論によれば、

播盡善之英聲(一) 起則天之雄響(二) 百代欽其美德(三) 萬紀懷其至仁(四)
得。

傾家敗德(一) 莫不由於嬌奢(二) 興宗榮族(三) 必也籍於高名(四)

奢、家、同韻。名、榮、同韻。失。

掘河沈璧(一) 封山紀石(三) 邁三五而不追(三) 踐八九之遙跡(四)

石と璧と跡と同韻なるも筆の逸氣にして累をなさず。掘は握を正とす。

第六、小韻。

小韻詩、除韻以外、而有迭相犯者、名爲犯小韻病也。……「若故爲疊韻、兩字一處、於理得通、如飄飄、窈窕、徘徊、周流之等、不是病限。」

□ □ □ □ □ □

□ □ □ □ □ 甲韻。

甲韻の外に乙韻丙韻が二つあるのが犯すのである。換言すれば隔字の疊韻をさけることである。元氏の説によれば、「元氏曰、此病輕於大韻、近代咸不以、爲累文。」と。「或云、凡小韻居五字内急、九字内小緩、然此病雖非巨害、避爲美。」

筆の例では、

西辭鄭邑(一) 南據江都(三)

得。

西辭鄭邑(一) 東居洛都(三)

失。鄭東同韻。

五雲曖曖(一) 麟宗所以効靈(三) 六氣氤氲(三) 柔和所以高氣(四)

不累。曖曖、氤氲は故意に使ふ。病に非ず。

祕府論に劉善經が説を駁して、曰、「其双聲疊韻、須以意節量、若同句有之、及居兩句之際、相承者、則不可矣。」

兩句の際に相承くるの例は、

學非摩揣(一) 誰合趙之連鷄(二) 但生與憂偕(三) 貧隨歲積(四) 任孝恭書

不可。雞、偕同聲。

蚩尤三豕(一) 寧謂嚴誅(二) 徐陵勸進表

不可。豕、誅双聲。

尙双聲關係の禁は更に次の傍紐・正紐に於て知るを要す。

第七、傍紐。

「傍紐詩者、五言詩一句之中有月字、更不得安魚元阮願等之字、此卽双聲、双聲卽犯傍紐、亦曰、五字中犯最急、十字中犯稍寬。」

卑見によれば、紐は韻尾を指すのであつて、某紐と言へば某韻と近い意義をもつ。章炳麟等から紐を頭子音の如くに用ひてゐるが、此は此の人達の使用してゐるもので古義ではない。反切で甲の頭子音と乙の韻尾を結び新字音を生ずる。音と音とを結ぶから紐と言ふかとも思はれる。尙よく考へるに、同音の變化してなせる所の一群の四聲を指す事から起つたかと思はれる。

平上去入

東宋送屋——一群。

元阮願月

これは同種類の音が變化したので之を紐といふ。この一組を正紐と言ふ。正紐の思想が起り次に傍紐の思想が起つたかと思はれる。漢字は、同一音が必しもみな四聲の變化を有せず、此が同じならば、平上去入の各韻種類の數が同數でなければならぬが、事實さうではなく、平聲が多く他の三聲の字が少い。此の人達の言ふ様に紐が頭子音をさすならば元阮願月は頭子音は同じで此に紐の區別はないわけだ。此を頭子音と見るのは近代の考で古代ではない。

「元氏云、傍紐者、一韻内有隔字双聲也。」「元兢曰、……又若不隔字而是双聲、非病也。」一韻とは五言二句である。思ふに傍紐病とは一定の字句間に字を隔てて韻尾を異にし、又は字形を異にする双聲字が存在する事を言ふ。

筆の場合は、

六郡豪家(一) 從來習馬(二) 五陵貴族(三) 作性便弓(四)

得。隔字双聲なし。

曆數已應(一) 虞書不以北面爲陋(二) 有命既影(三) (而周藉猶以服事爲賢(四))

失。彭周同聲。數書隔字同聲。

鑒觀上代(一) 則天祿斯歸(二) 迷聽前王(三) 則曆數彼□(四)

得失を言はず。

鑒觀、迷聽、共に双聲。失の例に挙げたのではないかと思はれるが説明がない。

上斯、代天、も失と思はれる。

隔字の双聲は異形の文字について言ひ、同形字については病としない。

文物以紀之(一) 聲明以發之(二)

大東小東

自南自北

以、之、東、自は皆同じ字で病を言はない。

尙、空海は或人の説として、文(上)梁(平)、飲(上)金(平)の類を傍紐と稱するものがあると稱してゐる。韻を異にしてゐる點から傍紐と言へよう。然し此は次の正紐とする方がよくはないかと思はれる。

第八、正紐。

(平聲)

(上聲)

(去聲)

(入聲)

入——一紐。

壬

征

任

急

金

錦

禁

邑

陰

飲

蔭

隻

征

整

政

隻

遮

者

柘

隻

「正紐者、五言詩、壬征入四字爲一紐、一句之中、以有壬字、更不得安征任入等字、如此之類名爲犯正紐之病也。」又或説を引いて「或曰、正紐者、謂正双聲相犯、其双聲雖一、傍正有殊、從一字之紐、得四聲、是正也。(若元阮願日月)若從他字來會成双聲、是傍也。(若元阮願月是正、而有牛魚奸硯等字、來會元月等字、成双聲是也。)又元氏を引いて、元氏曰、

正紐者、一韻之内、有一字、四聲分爲兩處、是也。」

右の所説により考へると、正紐とは同一字音が變化して四聲となつた一紐をいふ。かく一紐をなす字が一定の字句間に字を隔てて存在するを正紐病といふ。詩に於ては曠野莽茫。の莽・茫が一紐をなし、これをも病とする。と隔字には限らない事となる。

筆の場合は、

藉甚岐嶷(一) 播揚英譽(二) 得。

永嘉播越(一) 世道波瀾(二) 失。 永越一紐。

空海は猶眼心抄の筆十病得失の中で前述の八病の外に、第九隔句上尾、第十踏發聲が説いてあるが、上尾、鶴膝で説いた故別に獨立させない。

空海は音聲と意義の關係を説いて、曰「聲ノ等シカラザル、義各々之ニ隨フ。平聲ハ哀ニシテ安、上聲ハ勵ニシテ舉、去聲ハ清ニシテ遠、入聲ハ直ニシテ促。」と言ひ、更に進んで文學者が之を使用する場合を説き、「詩人參用スル、體モトヨリ常アラズ。請フ、試ニ之ヲ論ゼン。」と言ひ、筆に於ける句末の平仄について左の如く述べてゐる。

「筆ハ四句ヲ以テ科トナス。ソノ中兩句末並ニ平聲ヲ用フレバ言音流和ニシテ靡麗ヲ得。上去入ヲ兼ネ用ヒル者ハ文體發動シテ宏壯ヲナス。徐・魏ノ二作ヲ見レバ之ヲ知ルニ足ル。

鴻都寫狀(一) 皆殊一作旌烈士之風(二) 麟閣圖形(三) 咸紀誠臣之節(四) 莫不輕死重氣(五) 効命酬恩(六) 弃草莽者如歸

(七) 膏平原者相襲(八) 徐陵定襄侯表

蒼精父天(一) 銓與象立(二) 黃神母地(三) 輔政機修(四) 靈圖之跡鱗襲(五) 天啓之期翼布(六) 乃有道之公器(七) 爲至人之大寶(八) 魏收赤雀頌序

右ニ於テ徐ハ靡麗ヲ以テ名ヲ標シ、魏ハ宏壯ヲ以テ稱ヲ流ス。斯ノ文ニ觀ルニ又ソノ効ナリ。即チ筆ノ二三句ニ平聲ヲ用ヒタルモノハ靡麗、仄聲ヲ用ヒタルモノハ宏壯ナリ。」と。彼は又二三句末の平聲について、「同聲ナルモ同韻ナルベカラズ。」と言つてゐる。或曰「諸手筆第二句末ハ第三句末ト同ジキハコレ常式ナルモ、而モ只聲ヲ同ジクスベシ、韻ヲ同ジクスベカラズ。」と。單に同韻と言へば平聲と仄聲と何れも同じ種類に屬する事を嫌ふのである。「第二三句末ガ同聲ナルベシ。」「第四八句末等ハ順次ニ同聲ヲ避クベシ。」といふ此の二つの規則を實際に施すときは、筆の句末の平仄は八句の中に於て次の如くなるべし。

甲 式							
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)
平	仄	仄	平	仄	平	平	仄

乙 式							
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)
仄	平	平	仄	平	仄	仄	平

此の二式の何れかを繰返して繼續したものが最も聲律にかなふものである。

四聲八病の説は齊梁に起つたが、句末に於ける平仄は必ずしも原則通りに實行されたのではない。當時の王融・任昉・沈約の實際の作品を見れば判る。今空海の説いてゐる所は齊梁より隋を経て唐初に至る迄に段々發展して來て此までになつたものの様である。

(三) 對偶の精切

駢文に於て聲律に關する事は前述で略々盡きる。次に對偶について述べる。

對偶は事物の形貌・色彩・動靜・其他人事百般の種々相に於ても甲乙兩者の對映（對照）を生ぜしめて以て吾人の美感を引き起す事を目的とする。凡そ事物は單獨ではその美を起す事は出来ない。此と對映するものによつてその美を増大する。山と川・月と雲・花の紅白・色の濃淡・景物の明暗・遠近・大小・國の盛衰・時の古今の如き、甲を取つて之を乙と對映せしめることによつて益々美ならしめる。この對映は恰も繪畫が筆勢・色彩の調和によつて、彫刻が力の均衡によつてその美をなすと同じである。駢文の名稱は對偶があるから生じたのであつて、對偶は駢文の生命であると言つてよい。對偶中にも聲律に關する若干の部分があるがそれは後述する。

文章がある形式によつてその句法の上に對偶を爲し得るのは文字の特殊の性質、即ち一字一綴音である事と、六書の中の象形・指事・會意・諧聲がある事の二つが特に此をして便ならしめてゐるのであつて、この點は一定の字句の中で聲律をととのへる事が一字一綴音の性質に負ふ所があると同様、若しくはそれ以上に對偶はその性質に負ふものである。他國の文學には見られない現象で、支那文字の有する最も誇すべき特徴である。象形と指事は吾人をして文字を見て繪畫に對すると

近似せる興趣を生ぜしめ、又會意は文字を見て複雑幽玄なる意義を感知せしめ、諧聲は吾人の感情に相應する言調の快美を享受せしめる。諧聲はもとより支那文字の獨り有するものではないが、それが音聲と共に屢々意義を伴ふ事によつて、他國の諧聲と同じならざる所がある。駢文の對偶は此等の特徴を利用して出来る。

ここに對偶を語るに當り、駢文の特徴につき尙一言する必要がある。支那には從來此に關する専門の書がなく、對法を説くものは詩に關係があり、駢文について説くならば此の修辭法を組立てねばならない。幸ひにも對偶そのものの性質は詩に於けると文章に於けるとで大差はなく、僅かに句法等の差により異なる所が出来るだけである。故に先人が詩について述べてゐる所、又文について説く所を參照し、更に臆見を加へて略述する。

始めて對法を説いたのは、文心雕龍儷辭篇であらう。その中には、言對・事對・反對・正對の四種を説いてゐる。祕府論には廿九種の對を説き、宋・沈括「夢溪筆談」には廿四格十九圖の論があるが、その内容は不明である。游子六「詩法入門」は俗本であるが、對を述べて廿一種の法を述べてゐる。祕府論及入門に擧げる所は實用の便を主とし、分類は非論理的である。ここに此の二書を主とし、その中で謂れなしと思はれるものを省き、重複をさけ、性質により類別を施して要領を述べようと思ふ。

對法とは同種の品詞と品詞とを相對せしめる方法である。對法の意味は之につきる。併し古來對句に對して或種の命名があり、甚しきは殆ど對毎に名をつけようとする試みすらある。ここに主なるものをあげて參考に供しよう。

(一) 文字の性質上から見た對偶。——實字對・虛字對。

支那では名詞を實字、他を虛字とし、名詞も動詞として用ひる時は虛用と名づける。余は、名、動、形容詞の對を實字對

と見て、其他の品詞のを虚字對と見るのがよからうと思ふ。

實字對の例。

旌旗日暖龍蛇動
宮殿風微燕雀高

人物、鳥獸、花木、數目等に對して夫々の對名を設けようとする者があるが、斯の如きは繁煩に過ぎよう。
虚字對の例。

若教解語應傾國
任是無情也動人

祕府論に、的名對・異類對がある。曰、「的名對者正也、凡作文章、正正相對、上句安天、下句安地、上句安山、下句安谷、上句安東、下句安西……如是之類、名爲的名對。……堯舜、皆古之聖君、名相敵、此爲正對、若上句用聖君、下句用賢臣、上句用鳳、下句用鸞、皆爲正對、如上句用松桂、下句用蓬蒿、松桂是善木、蓬蒿是惡草、此非正對也。」と。此の言葉から推して、的名對とは同類對といふ如きものである。但、空海は例のみあげて類の説明が無い故不分明である。結局彼が判斷して同類と認められたものが同類であつて、門外者には不明である。
的名對の例。

東園青梅發
西園綠草開

駢文概説

手披黃卷盡

目送白雲征

日月光天德

山河壯帝居

異類對とは、天山・雲微・鳥花・風樹の如き異類を對とするもの、蓋し動物と植物、氣象と靜物との如き關係のものを指す。

異類對の例。

天清白雲外

山峻紫微中

鳥飛隨去影

花落逐搖風

風織池間字

虫穿葉上文

彼は又、

或雙聲以酬疊韻或雙擬而對迴文別致同辭、故云異類、

(酬とは對するの意)と言ふが、これをも異類の中に入れるのは余は賛し得ない。

(二) 字の句中に於ける位置から見た對偶。

(1) 句中對 (當句對)

一句中で既に相對する字あるもの。

江流天地外

山色有無中

今空無古迹

宋復有唐文

四年三月半

新筆晚花時

白頭青鬢無存沒

落日斷霞無古今

桃花細逐楊花落

黃鳥時兼白鳥飛

時同節異

物是人非

駢文概說

薰歇燼滅
光沈響絕

(2) 互成對

一句中で對をなすものが、又他の句に對し對をなす。

天地心閒靜
日月眼中明

(3) 交股對。(交絡對。蹉對)

句中の字の位置が上下交互に對をなすもの、

舳艫爭利涉
來往任風潮

春深葉密花枝少
睡起茶多酒盞疎

祕府論には交絡對の例として文につき次の例をあげてゐる。

出入三代
五百餘載

余は此の類中に次の例をあげようと思ふ。

蕙肴蒸兮蘭藉

奠桂酒兮椒漿

(屈原九歌)

筆では次の例をあげよう。

昔嘗歡宴、風月留連

追憶平生、宛然心月

(庾信思舊銘序)

(4) 錯綜對

字の位置が平常とは逆におきなされるもの、一種の倒裝法である。次の例は受動物が能動物の上にある。

柳絮打殘連夜雨

桃花吹散五更風

香稻啄餘鸚鵡粒

碧梧棲老鳳凰枝

(5) 廻文對。

字の位置が上下句で轉倒するもの。

駢文概説

情親由得意

得意遂情親

新情終會故

會故亦經新

(三) 句の位置から見た對偶。——扇對(隔句對)

四句間に言ひ、第一句と第三句とが對し、第二句と第四句とが對するものを言ふ。

(一) 昨夜越溪難 (二) 含悲赴上蘭

(三) 今朝踰嶺易 (四) 抱笑入長安

(一) 挈壺宣夜 (二) 辨氣朔於靈臺

(三) 書笏珥彤 (四) 紀言事於仙室

(齊王融三月三日曲水詩序)

古く詩經時代からある。

(一) 昔我往矣 (二) 揚柳依依

(三) 今我來思 (四) 雨雪霏霏

(詩 小雅采薇)

次に文筆の單對及隔對については更に少しく詳述しようと思ふ。一句の字數と句の位置と、此の兩者の關係から對句を見

ると、大別して、單對・隔對の二種がある。

(1) 單對。

單對とは前後兩句同数の字數を以て對偶するもの。前句を出句、後句を落句といふ。その、字を以てするものを壯句、四字を緊句、五字以上を長句といふ。句末及第二字の平は前後句相友するを原則とする。又、同句中の第二・四字は平相反するを佳とする。九字以上の句は實際上は二句と見なすべきものが多い。

①三字 搖玉變

發清吹

(顏延之曲水序)

②四字 霜竹浮陰

風梧散葉

(梁簡文上皇太子玄圃譚頌啓)

③五字 高樹翳朝雲

文禽蔽綠水

(應璩與滿公琰書)

④六字 鏡文虹於綺疏

浸蘭泉於玉砌

駢文概說

(王融曲水詩序)

⑤七字

玉樹以珊瑚作枝
珠簾以玳瑁爲押

(徐陵玉臺新詠集序)

潦水盡而寒潭清

煙光凝而暮山紫

(王勃滕王閣序)

落霞與孤鶩齊飛

秋水共長天一色

(同右)

⑥八字

仲孺不辭同產之服
孟公不顧尙書之期

(應璩、與滿公琰書)

⑦九字

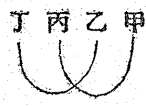
庶無雜拜以累於君公
不使繁聲見愛於仲子

(李商隱、上楊相公啓)

(2) 隔對。

隔對とは、四句の間に行はれるもので、その第一句と第三句、第二句と第四句とが夫々對偶をなすものを言ふ。余は實際の便宜を主として四句を分けるが、押韻の文體では余の言ふ第四句に押韻する故、前二句で一句といひ、之に對し後の二句で一句となる關係がある。或は余の言ふ二句を一句と見るものがある。之に従へば、隔對も亦兩句の間に行はれると見るを得。但、さう言へば一句二句の概念が混雜を生ずるおそれが多い。故に隔對が二句から成ると言はうとするならば、少くとも「隔對は二句を以て成る出句一句と二句を以て成る落句一句とより成る。」と言はなければ意味不明である。(押韻でない時は前の呼方は都合悪い。)

單對が既に生ずれば隔對は自然に之より生ずべきものである。假にこゝに甲乙丙丁の句があり、内容が丙は甲と丁は乙と關係すると假定すれば、この時更にその内容の直接の連繫を主として先づ甲と丙とを連繫し、次に乙と丁とを連繫すれば、ここに一個の單對の代りに一個の隔對を生ずる。隔對は蓋しかゝる順序で發達したのであらう。



實例をあげると、

(甲) 伯奇放流

孟子宮刑

申生雉經

(乙) 屈原赴湘

駢文概說

- (丙) 小弁之詩作 (伯奇)
(丁) 離騷之辭興 (屈原)

(漢書馮奉世傳贊)

内容の連絡あるものを並べると、

- | | |
|----------|-----------|
| (甲) 伯奇放流 | (丙) 小弁之詩作 |
| (乙) 屈原赴湘 | (丁) 離騷之辭興 |

之をまた直ちにつらねると、

- | | |
|----------|-----------|
| (甲) 伯奇放流 | (丙) 小弁之詩作 |
| (乙) 屈原赴湘 | (丁) 離騷之辭興 |

となり一聯の隔對を生ずる。

- | | |
|--------------|-------------|
| (甲) 不煩一介之使 | (甲) 朱鮪喋血于友于 |
| (乙) 不損連城之價 | (乙) 張繡剽刃于愛子 |
| (丙) 既有秦昭章臺之觀 | (丙) 漢主不以爲疑 |
| (丁) 而無蘭生詭奪之誑 | (丁) 魏君待之若舊 |

(曹丕、與鍾大理書)

(邱遲、與陳伯之書)

此も二對の單對を變じ、内容の連絡あるものを直接つゞければ、甲丙、乙丁と一聯の隔對を生ずる。

この隔對に對して夫々専門語を生ずるに至り、出句の上下句、落句の上下句の字數の多少によつて種々の命名がある。上四、下六のを輕隔句、上六、下四のを重隔句と言ひ、此が四六句の最も普通なるものである。上三、下五又は五以上のものを疎隔句、逆のを密隔句、上句下句の字數が等しいものを平隔句といふ。今、上述の他に、上の句が字少く、下句が字多いもの、又はその逆の、不定字數の隔對句を雜隔句とする。

例

輕隔句

關山難越 誰悲失路之人
萍水相逢 盡是他鄉之客

(王勃、滕王閣序)

重隔句

屈賈誼於長沙 悲無聖主
竄梁鴻於海曲 豈乏明時

(王勃、滕王閣序)

疎隔句

比李膺 則仙舟對棹
方馬融 則絳帳雙褰

駢文概說

(李商隱、上韓琬啓)

密隔句

例省く。

平隔句

琵琶新曲 無待石崇

繁後雜引 非關曹植

(徐陵、玉臺序)

漢王不卽位 無以貴功臣

光武不止戈 豈謂紹宗廟

(沈炯、勸進表)

李邕尉之風霜 上蘭山而箭盡

陸平原之意氣 登河橋而路窮

(庾信、擬連珠)

(四) 字音より見た對偶。

(1) 聯綿對。

一句中で一字が獨立して用ひられ、而も連續するもの

看山 山已峻
望水 水仍清

山、水は獨立して用ひたのであつて、山山、水水と言つたのではない。

(2) 連珠對。

二字連續して義をなすもの。即ち重字、疊字の場合。

穿花蛺蝶深深見
點水蜻蜓款款飛

(3) 雙擬對。

一句中で同字を連續せずに繰返し、繰返される場合が上下句で對應的なもの。此の對は字の位置より見る時は「はさみ對」と言つてもよいであらう。

秋陰 秋未歸
冷消 冷易追

空海曰「兩秋字、擬一陰字、……兩涼字、擬一消字。」と。擬の意不明。空海の説明ははさむことだけを言つてゐるがはさみながら對する事を要する。

思君念君
千處萬處

聯文概説

(4) 賦體對。

賦體に似てゐる故名づけたと言はれる。要するに重字、双聲、疊韻の對である。此の三者が更にその句の首、腹、尾にある場合の區別がある。或は双聲を双聲に對せしめ、双聲を疊韻に、疊韻を疊韻に對せしめるものもある。

重 字

句首 裊裊樹驚風
麗麗雲蔽月

句腹 漢月朝朝暗
胡風夜夜寒

句尾 月蔽雲曨曨
風驚樹裊裊

雙聲對雙聲

一之日噉發
二之日栗烈 (詩七月)

雙聲對疊韻

參差荇菜 左右流之
窈窕淑女 寤寐求之 (詩關雎)

雙 聲

句首 留連千里賓
獨待一年春

句腹 我陟崎嶇嶺
君行嶢嶢山

句尾 妾意逐行雲
君身入暮門

疊韻對雙聲

巧笑倩兮
美目盼兮 (詩碩人)

疊韻對疊韻

燕婉之求
籛除不鮮 (詩新臺)

疊 韻

句首 徘徊四顧望
悵悵獨心愁

句腹 君起燕然戍
妾坐逍遙樓

句尾 疎雲雨滴瀝
薄霧樹朦朧

(5) 借韻對。(聲對、假對、借對)

字形は異なるも音同じきが、音を假りて對せしめるもの。日本人には分りにくい對である。

根非生下土 下||夏

葉不墜秋風

厨人具雞黍

稚子摘楊梅 楊||羊

捲簾黃葉落

開戶子規啼 子||紫

水春雲母碓

風掃石榴花 楠||男

(五) 字の形より見た對偶。

(1) 側對。

二字の形・音は本來對をなすのではないが、字形の一部分が對するものを言ふ。目で見えるものである。

馮翊 馮||馬

龍首

駢文概說

泉流 泉—白
赤峰

(2) 切側對。

實物は相對しないが字形が相對するもの。

浮鐘宵響徹
飛鏡曉光斜 飛鏡 月

(3) 字對。

字は同形同音であるが別の意に用ひられるもの

桂櫂
荷戈

山椒架裏霧
池篠韻涼颺

推薦
拂衣

祕府論は此の部に次の例をあげて假對の目を設けたが、余は字對の内に含めて可なりと思ふ。推薦は普通の意の外に「薦ヲ推ス」とも見られる故に拂衣と對せしめたのである。

(六) 句法對。

(1) 流水對。

二句で一意をなすもの。句の字面は相對するも、意は前後繼承するもので、對句ではあるが散文を読む如き感がする。

將余去國淚

灑子入鄉衣

但將酩酊酬佳節

不用登臨歎落暉

豈知鶴髮殘年叟

猶讀蠅頭細字書

(2) 走馬對。

句は相對してゐるが意は前後相承けついでである。

野老來看客

河魚不用錢

名は走馬對であるが、實質的には流水對と違はない。

(一) 雖接燕分管

(二) 稱天子之舊都

(三) 而向術當衢

(四) 有高人之甲第

流水隔句對。

以上の外に事柄によつて、景の外に人事を置くものを情景對、懷古せるものを懷古體、又對句の完全不完全により、偏對、總不對、不對之對、不對處對、がある。

偏對とは、意義は對するが字面上では對しないもの。換言すれば一部分が相對せるもの。此は散體から駢體に轉ぜんとする初期の文章、又は駢體が成立せる後にも故意か無意識的か實際上屢々あるのを見受ける。祕府論には次の例がある。

蕭蕭馬鳴

蕭々—悠々、可。

悠悠旆旌（詩車攻）

馬鳴—旌旗、不十分。

古墓犂爲田

犂爲田—摧爲薪、可。

松柏摧爲薪（古詩）

古墓—松柏、不十分。

享皋木葉下

木葉—秋雲、可。

隴首秋雲飛（梁柳惲）

享皋—隴首 不十分。

筆の例

輪輿徐動

泉水激石、泠泠響

參從無聲

好鳥相鳴、嚶嚶成韻

外嘉郎君謙下之德

（一）積粟萬鍾 （二）思負米而何得

內幸頑才見誠知己

（三）棲題三尺 （四）泣吾親而不見

誦顏氏之箴瓢

詠原憲之蓬戶

四、典故の利用

典故とは古典に存する言・事を言ふ。支那では用典とは言・事共に含めてゐるので、言・事を併せて一の意の様に使ふが典とは古典に存する言辭を言ひ、故とは古典に存する事例を言ふものとして區別するがよい。以下古典に存する意は故言と言ひ、古典に存する事は故事と言ふ。故事を使用するのを支那では隸事と言ふ。

故言は單に古代の言語を言ふばかりでなく、經史等に見えて格言たる價值あり、又は作者については自分が其を創成するよりもその場合は故言の方が適切有效であるとしてそれを利用する。此種の故言はそれ自身既に價值あるものであるから制限された句に於て使用する時は字數が最も簡であり意義が最も豊富であるといふ効果をあげる事が出来る。此は散文に於ては故言は作者が多く其意義を敷衍するか、又は自分の所説の眞實にして且價值のある事を證せんが爲に使用せられるのに對して、散文では故言は作者が直に此を自己の言の如くにして使用するものである。

文昭武穆、附墓也如彼、

天平地成功、業也如彼、

(徐陵勸進表)

左傳、書經。

可大可大、永固皇王之緒

貞觀貞明、獨照陶鈞之上

易。

駢文概說

〔上官儀勸封禪表〕

〔天地能覆載之、而不能容之於度外
父母能生育之、而不能出之於死中〕

後漢書袁敞傳、張俊の言。

〔蘇軾黃州謝表〕

故事は過去の人が爲したある事態の前例である。作者の對象とする眼前の事態は單獨にその事態として寫すよりも、其と殆ど類似せる、或は類似の點は少くとも何等かの關係ある過去の前例と同意の比較によつて此を寫す方がより以上に適切有效であらう。原文で作者が故事を使用するに當つては眼前の事態と前例の同意比較を言葉の上に明示する時もあり、しない時もある。明示しない時は眼前の事態を直ちに前例そのものであるとして表示する場合は、故事を使用する効果は修辭學に所謂直比の効果である。吾々は花を見て雪の様だと言つたり、月光を霜の様だ、銀の様だと言ふのは白いといふ類似の性質による類比である。直接花の事を香雪、月を銀盤、氷輪と言ふ。支那では此を異名と言ふ。此は即ち直比である。眼前の事態を指して過去の前例の如しと言はすして前例そのものなりと言ふのが直比である。兩者は只一は簡單なる言辭を用ひると、他は複雑なる事例を用ひるとの差があるだけで、修辭の効果は全く同様である。

〔不追子晉 而事似洛濱之游〕

〔多愧子桓 而興同漳川之賞〕

似・同。比較の語。

〔蕭統答湘東王求文集書〕

豈問千秋 自譏烏丸之地
脫逢壯武 方著博物之書

間接の比較。

(蕭統謝勅賚地圖啓)

親則東牟
任帷博陸

直接の比較。

徒懷子孟社稷之對
何救昌邑爭臣之議

直接の比較。

(任昉爲齊明帝讓宣城郡公第一表)

此の典故の使用につき、其性質を考へ、精密な分類を試みた者のある事は知らぬが、前に一言した通り、文心彫龍儷辭篇に「言對、事對、正對、反對アリ。」とある。言對は古言に比して今言即ち作者の胸臆の言をも包含してゐるだけ意味が廣く作者の胸臆から出た言對は自分が作り出した言辭で、古人の言を借りないものである。

威風所振 烈火之過鴻毛
旌鼓所臨 衝風之卷秋葉

(庾信)

事對はここに言ふ故事と同じである。彫龍に「言對トハ空辭ヲ双比スルモノナリ。」とある。その例に、

修容乎禮園
翺翔乎書圃

(司馬相如上林賦)

又事對を説いて、曰「事對ハ人類ヲ舉グルモノナリ。」と言ひ、その例に、

毛嫱鄺袂 不足程式
西施掩面 此之無色

(宋玉神女賦)

反對の例を擧げて、

鍾儀幽而楚奏
莊舄顯而越吟

(王粲登樓賦)

正對の例を擧げて、

漢祖想粉榆
光武思白水

(張載 七哀詩)

反對、正對の二例は同じく故郷を慕ふ例であるが、前者は一は宰相、一は囚人、一は貴、一は賤、後者は何れも同じ身分

で同じく故郷を想つてゐる。ここで雕龍は二對を評し、其の優劣と理由を述べ、

幽顯同志、反對所ニ以爲優也、並貴共心、正對所ニ以爲劣也、

と言ひ、事對を作る事は言對より難しく、事對では反對が正對に優る事を述べるに止つてゐる。

近頃元和（江蘇）の孫德謙が「六朝麗旨」を著し、その中で六朝駢文の運典について凡そ五の場合を説いてゐる。

- (1) 昔ヲ地ニ述ベテ今ニ喩ヘ、併セテ以テソノ文氣ヲ足ス。
- (2) 借リテ以テ襯誦シ、用テ今ノ美ヲ彰ス。
- (3) 別ニ他物ヲ引キ、取リテ以テ證ヲ佐ク。
- (4) 義頗ル相符スルモ、反テ未ダ稱ハザルガ如クス。之ヲ伸ブルハ彼ヲ屈セシムル所以ナリ。
- (5) 本題ニ涉ルナク、力ヲ盡シテ描摹ス。

例一

伏惟殿下

愛睦恩深

常棣天篤

北海云亡 騎傳餘藁

東平告盡 驛問留書

嗚呼此恨

駢文概説

復在茲日

(梁簡文帝敕南康簡王薨上東宮啓)

孫氏曰「古ノ北海・東平兩人ノ故事ナレバ、文、愛睦二語ニ至ツテ窮ス。此故典アルニヨツテ藉リテ收來シ、文氣モ亦充滿ス。

例二

昔

魏明仙掌 竟無靈液

漢武金盤 空望雲表

豈若

神漿可挹 流味九戸之前

天酒自零 疑照三階之下

(隋盧思道爲百官賀甘露表)

孫氏曰「右ノ例ハ襯誦ニヨツテ今ノ美ヲ表ス。古典必ズシモ確切ナラズ。仙掌等ノ事以テ比擬スベシト雖モ、尙今日ノ甘露ノ眞ニ瑞應タルニ若カザルヲ言フ。」

例三

南陽雉飛 尙論秦霸
建章鵠下 猶明漢德

當今

天不愛寶
地必呈祥

自應

長樂觀符
文昌啓瑞

(庾信爲齊王進赤雀表)

孫氏曰「右ノ例ハ別ニ他物ヲ引キテ證ヲ佐ク。文題ハ赤雀ナリ。晋ノ雉、漢ノ鵠ヲ舉グルハ不類ナルヲ以テ、尙論、猶明等ノ語ヲ以テ之ヲ申説ス。本典ノ用フベキナキヲ以テ旁證ノ法ヲ行フナリ。」

例四

每想南皮 書憶阮瑀
行經北館 歌悼子侯

不足

駢文概説

輩此深仁

齊茲舊愛

(梁劉孝儀從弟喪上東宮啓)

孫氏曰「右ノ例ニ於テハ義ハ頗ル相符スルモ、却テ未ダ稱ハザルガ如クスルナリ。他文中ニ所謂、『方之蔑如』『曾何足歸』等云フハ、コレ此ヲ伸ブルハ彼ヲ屈セシムル所以ナリ。」

例五

班姬之扇 末掩驚羞

假蔡琰之文 寧披悚戴

(陳江總爲陳六宮謝表)

孫氏曰「右ノ例ニ於テハ本題ニワタル事ナクシテ力ヲ盡シテ描摹スルナリ。班・蔡ノ事略々六宮ニ貼スルモ、實ハ班扇ハ只借リテ驚羞ヲ寫シ、蔡文ハ悚戴ヲ形スノミ。上句ハ謝ヲ言ヒ、下句ハ表ヲ言フ。故ニココニ以テ又遂ニ篇ヲ終フ。又文中經典ヲ隨括シ、題ニ關スル事ナキモ以テ我ガ驅遣ニ供スベキコトヲ徴スルニ足ル。」

孫氏は此五例を擧げた後に「此五例ヲヒラク、恐ラクハ未ダ言ヲ盡サズ、而モ六朝運典ノ法ハホゞ此ニ具ランカ。」と言つてゐる。

蓋し余の前述の通り故事使用の方法は今事故事の性質の同異によつて、或は單にその類似を比較し、或は兩者の優劣を比較し、或は類似なきもそこに何等かの關係を見出せば此を借り來つて我が言はんと欲する所に對して此を適當に利用せんと

する事に存する。

五、修辭の巧美。

其意義は甚だ廣汎で辭句の整齊、音調の諧美、典故の利用、等は皆修辭を巧美ならしめる所以である。南北朝時代の駢文を用ひて山水を寫し、四時を敘し、或は居處、佳人、物態、人情を描いたものはその美は一々拾ふにたへないものがある。其等は皆上述の條件を具へてゐるからである。名詞・形容詞・動詞其他の品詞の用法によつて之を鍛鍊して、然る後始めてかゝる妙が得られる。それが何故妙であるかは説明困難である。ここに駢文の辭句用語等に於て注意すべきものについて述べる。

(一) 用字法。

(1) 虚字の使用。

駢文中に對偶を作るに當り句が實字を以て埋められた時に往々流動の致を缺く事がある。かゝる際には虚字を加へて其弊を防ぐ。

俾 忠貞之烈 不泯於身後

大賁所及 永秩於後人

(宋傳亮)

客遊梁朝 則聲華藉甚

薦名宰府 則延譽自高

駢文概説

(梁任昉)

才異相如 而四壁徒立
高慚仲蔚 而三徑沒人

(梁邱遲)

第一例の「於」、第二例の「則」、第三例の「而」は意味上は省いても差支へないが、此あるが爲に句が延びて句法に活氣を生ずる効果となる。

曜靈既隱 繼之以朗月

高春既夕 申之以清夜

(梁蕭統)

「之」の字はなくても意味に變りはない。

此は一聯の句法に於ける場合であるが、一群の隔句を率ゐて文意の通行をはかる際にも虚字の使用をなす。これ又本來必ずしも對句の部分以外に於て必ず虚字を要するのではないが、此を使用する事によつて容易に文意を進展せしめる事が出来る。孫氏はかゝる場合の虚字を以て駢文の血脈であると言つてゐる。孫氏は次の例をあげてゐる。

頃 學尙廢弛、後進頽業

衡門之内、清風輟響

良由 戎車屢警、禮樂中息

豈可^〇不^〇

浮夫近志、情與事梁

敷崇墳籍、敦厲風尚

此境人士、子姪如林

明發搜訪、想聞令軌

然

荆玉含寶、要俟開瑩

幽蘭懷馨、事資扇發

獨習寡悟、義著周典

今

經師不逮

而

赴業無聞

非^〇惟^〇

志學者鮮

或^〇是^〇

勸誘未至耶、想復宏之

(宋武帝劉裕與靈勅)

良由、豈可不、非惟、或是、につき孫氏は血脈貫注の語法として且曰「若シ後人ヲシテ之ヲ爲サシメバ純ラ對偶ヲ用ヒテ
虚字ノ其間ニ流通スルナカラン。」と。

私は此と異り、虚字はなくても血脈は實字にもあり、又虚字について言ふならば〇〇の部分ばかりでなく、||の印の所
にも血脈がある。

孫氏は駢文について「上抗下墜 潛氣內轉」を説き、自ら得意の説としてゐる。その例として、

雖汾陽之舉 輟駕於時難

明揚之旨 潛感於窮谷

矣

曰「上ニ雖ノ字アリテ明揚ノ句ノ上ニハ而ノ字ヲ用ヒテ轉筆セズ。下ニ語ハ上ニ語ニ接スルモノニ似タリ。實ハ其氣既ニ轉ゼルナリ。上抗下墜 潛氣內轉トハカクノ如キモノヲ言フ。」

彼ハ又「文章家承ノ轉ニハ上下ニ必ズ虛字ヲ用フルモ、六朝ハ然ラズ、往々虛字ヲ加ヘズシテ文氣ハ既ニ轉ジテ後ニ入ルモノアリ。」と言ひ諸例を擧げてゐる。

豈能

戚戚勞於憂畏

汲汲役於人間

齊謳趙女之娛

八珍九鼎之食

結駟連騎之榮

修袂執珪之貴

樂既樂矣

憂亦隨之

(梁蕭統陶明集序)

饕餮之徒

其流甚衆

唐堯四海之主 而有汾陽之心

子晉天下之儲 而有洛濱之志

輕之若脫屣

視之若鴻毛

而況於他人乎

彼曰「不注意ニ之ヲ讀メバ齊語以下ノ文ハ「豈能」兩句ノ後ニ接スルカニ考ヘラルルモ、齊語以下ハ辭氣既ニ轉ゼルモノナリ。」と。又「同文中ノ饕餮ノ二句ト唐堯以下ハ意ハ聯關セズ。而シテ唐字ノ上ニ虛字ヲ用ヒズ、而シテ其氣ハ轉ゼルナリ。故ニ六朝人ノ文ヲ讀ムニハ潛氣内轉ノ妙訣ヲ識得スベシ。」と。

私の見る所では妙訣といふ程の事ではない。或場合には虚字が明示せられ、又或場合には裏面にその意があつて表面に明示されてゐないだけの違がある。又文章離合の際に於ては、必ずしも下句が上句と接続するものではなくて、一度は上と相離れ、若干句の後に至つて始めて上と接する事は散文に於ても屢々見る所であつて、毫も怪しむに足りない。まして對偶を重ねる駢文では何の怪しむ所もない。

(2) 鍊字。

字を鍊る事は各品詞について皆ある筈である。若干の場合について之を述べる。

孫氏は代字訣といふ專を述べてゐる。代字とは代替字の義となる事がある。代替字は甲の字を用ひては不便な時に單に乙字を用ひるだけのこととて、修辭的のことは別に意味しない。此は天子の諱等の場合に用ひられる。例へば唐の太宗は李世民、世の代りに「代」を用ひる。但し此は諱に限らず平仄上の必要よりする時もある。年を歲載とするのはそれである。孫氏の言ふのは此と異り。修辭的の意義を含んで言ふ。

糝糠六籍

糝糠—廢棄。

譽馥區中、道菱氓外」

馥—播。菱—高。

(江淹、齊太祖誄)

禮藹前英、寵華昔典」

藹—茂。華—盛。

(江淹、爲蕭拜太尉揚州牧表)

曝背拘牛」(邱遲、永嘉郡教)

拘—牽。

架卓魯於前籙」

架—駕。

(孔德璋、北山移文)

孫氏は代字の効を説いて、曰「文ニ代字訣ヲ用フルハ陳ヲ避ケ新ヲ得ル、道ナリ。駢文ニ從事シテ代字ノ訣ヲ知ラザレバ字ヲ遣リ句ヲ造ル何ゾ古雅ナラン。此レ六朝ノ作者ノ多ク小學ニ通ズル所以ナリ。然レドモ此ヲ一二字ニ施スノミナラズ、

體相稱フヲ待ツテ始メ完美ナリトス。コトサラニ生僻ヲ求ムルモ亦之ヲ失ヘリ。」と。

此の末段の注意は最も簡要である。率直を避けて修飾を爲すのはよいが、用その法を得ない時は生僻に陥つて却て本來の目的と相違を生ずるに至るであらう。孫氏の意を推せば、代字は結局鍊字に歸す。彼は飾文の例を擧げて、

紆賢之愧」

紆＝諧。(屈)

(沈約、爲武帝與謝朓敕)

靜民紐亂」

紐＝譬去。(孫氏說)

(江淹、爲蕭拜太尉揚州牧表)

鐘迹幽谿」(王褒、與周弘讓書)

鐘＝削平。

娥月寢耀」

寢＝息・止。

(王僧達、祭顏光祿文)

魂祈夢請、駐心挂氣、……無使匹概血誠、不諒於璿宸、宏芳英猷、遂蕪於里聽」

(江淹、爲蕭公三讓揚州表)

鉉司崇貴、袞位淵嚴、……血祈旦亮、懃志夕滿」

(江淹、爲蕭驃騎讓太尉增封第二表)

彼曰「一字ヲ安ズル毎ニ幾度カ陶鍊ヲ經テ出ス。眞ニ屢々獨創ノ妙アリ。文通(江淹)ヨリ外作者概ネ然リ。備載セザルナリ。」と。孫氏は難字を用ひた例ばかりをあげるが、余は思ふに習見の字を避けて珍怪なる字を用ひるのは鍊字の本義では

ない。ここに若干の句の例をあげよう。

高峰入雲

森壁爭霞、孤峰限日、幽岫含雲、深溪蓄翠」

かゝる場合の入・争・限・含・蓄等の字、高・森・孤・幽・深等の形容詞はその他の諸々の名詞と相俟つて調和を得ることによつてのみ文學的價值を生ずるものである。鍊字は全體の一部分として爲される。鍊字の意を解せず一步を誤れば奇僻自ら喜ぶに止り、決して美的效果を擧げる事は出来ない。

右は意義の上について述べたが、音調の上からも爲される事は言ふ迄もない。梁書の王筠傳にある逸話に、沈約が郊居賦を作つて、未だ出来ない時に王筠を呼んで草稿を見せた。筠は讀んで「雌霓連陸、墜石礎星」の所へ來て、霓を入聲（五結反）に讀んだ。沈約は掌を打つて喜んで言ふに、「自分は人がその字を五雞反（平聲）に讀まんかと恐れてゐた。今君五結反に讀む、實に意を得たり。」と。其他「氷懸埒而帶坻」の句に至つても韻の讀方が沈約の思ふ通りであつたので沈約が非常に喜んだといふ。此によると、如何に一字の音調に重きを置いてゐたかを知る事が出来る。

又字形は、文心雕龍練字篇には字形にまで言及し禁止の條項をあげてゐる。

其一は詭異を避ける。棼心惡咽嗽（會據）咽嗽は詭異で目を害する。

其二は聯邊を避ける。半字同形なるものに三字迄はよいがそれ以上は避くべきである。此は主として五言詩の部分について言ふ。

綺縞何纒紛 (曹植)

其三是重出を權る(加減する)。同字を二度出す事は思想重複を示す。是非とも二字が必要ならば差支へない。

其四は單複を整へる。單複とは字劃の多少、肥瘠を言ふ。瘠字句を重ねれば纖疎にして行劣なり、肥字句を積み重ねれば臃腫として篇闇し、つまり少劃の字ばかり、多劃の字ばかりを累ね用ひる時は見る人をして不決を覺えしめる。

(3) 成語の省略使用、即ち斷語。

駢文の中で古人の成語を使用する場合に、そのまゝ使用する事もあり、又ある部分を切取つて省略して使用する場合もある。成語のある部分を切取つて特殊の意義に使用するのが斷語といふ。特殊の意義とは、(一)成語本來の意義、(二)それに近いもの、(三)必ずしも成語本來の意義によらず、使用者が賦與する新しい意義、を言ふ。

斷語の名稱は孫氏が用ひてゐる。その例を要約して示せば次の如きである。

逮惟則哲 在帝猶難。

(任昉、爲范尚書讓吏部封侯第一表)

知人則哲(尚書、皐陶謨)こゝは則哲とだけあるが、知人則哲の意味である。

道被如仁 功參微管。

(任昉、爲范始興求立太宰碑表)

桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也。如其仁如其仁。(論語、憲問)

微管仲、吾其被髮左衽矣。(論語、憲問)

駢文概說

微管之數、撫事彌深

道亞黃中、照鄰殆庶

參軌伊望、冠德如仁

(傳亮、爲宋公修張良廟教)

顏氏之子其殆庶幾乎。(易、繫辭傳)

起予懷聖、發言中旨

(沈約、安陸昭王碑)

起予者商也。(論語、八脩)

想雅思所未及、謹書起予。

(應據、與廣川長岑文瑜書)

恐弟未究東川人士、聊復起予今言。

(閔弘讓、與徐陵薦方圓書)

側望起予。(隋、楊暕、召王貞書)

痛心拔腦、有如孔懷。

(陸機、與長沙顧母書)

兄弟孔懷。(詩、常棣)

再喜見友于（陶詩）

惟孝友于兄弟。（尚書、君陳）

籙金遺其胎厥」

（謝朓、謝隨王賜左傳啓）

貽厥之寄」（王儉、褚淵碑）

貽厥子孫。（尚書、五子之歌）

實望貴然」（任昉、爲慶泉之與劉居士虬書）

貴然來思。（詩、白駒）

年在中身、疾維疢疾。

（顏延之、陶徵士誄）

文王受命惟中身。（尚書、無逸）

劉氏歸國、未聞漢儲之禮、曹植還蕃、非降魏兩之賜」

（沈約、謝賜軫綢絹等啓）

明兩作離。（易、離）

甲族以二十登仕、後門以過立試走、八元立年、居息隸而見抑」

（梁武帝、申飾選人表）

三十而立。(論語、爲政)

以上は本義の通り使つてゐるが、以下は意義を變へてゐる。

晩生後學、匪無面牆、卓爾出群、斯人而已。

(陳後主、與江總書)

面牆而立。(論語、陽貨)

先が見えない。

夫子之牆數仞。(論語、子張)

宮牆にたとふ。

作者は「利口なもの」の意に用ひてゐる。此を若し成語そのものによつて論ずれば作者の誤用とも言ひ得るが一々の場合の作者が用ひた意味を判斷せねばならぬ。

斷語は駢文より當然生ずる。短い句中に多くの義を包含せしめようとし、又字數に制限される故、最も簡単な字數に切りつめる事を要求される。此は複雑な事件を過去の事例を借りて比方するに似たものである。斷語を始めて作る時は人をして異様に感ぜしめるが、巧に作られるか、又は段々慣用せられるに至れば一種の經濟的な用語として通用する様になる。

第三章 駢文各部全體の調和

段々と述べて來た所は駢文の形態性質について重要と思はれる諸條件であつた。此等の諸條件を具備して、各語はもとより、全體として調和を得てゐるものを駢文の上乗なるものとする。そしてその調和を得てゐるか否かを判斷するのは其人に存する。

第四章 駢散合一説を論ず

最後に駢散合一説について論評を試みる事によつて私の駢文觀を述べ、此の講議を終らうと思ふ。

清朝の劉開（孟塗）を始めとして孫德謙に至るまで、駢散合一の思想がある。私は此等の人々の駢文思想の明瞭でないのに苦しむ。彼等も駢文は對偶を主要部分とする文體を稱すと言つてゐるのだと考へてゐると、普通は散文として考へられてゐる司馬遷の報任安書を文文に入れてゐたり、或は又四六を駢文から除き去らうとしたり、我々を迷はす事甚しい。然し私は彼等の言葉にかゝはらず對偶を主要部分とする文を駢文と定めたから、辭賦、四六は當然駢文の中に含まれる。只私は便宜上押韻してゐるものを省き、押韻してゐないものについてのみ述べようとするのである。

劉開は駢散合一の説をなして、曰「夫レ文辭ノ一術、態ハ百變スト雖モ途ハモト源ヲ同ジクス。經緯錯リ以テ文ヲ爲シ、玄黃合シテ采ヲ成ス。故ニ駢ト散トハ派ヲ並ベ流ヲ爭フ。塗ヲ殊ニシ轍ヲ合ス。千枝秀ヲ競フハ卽チ獨木ノ榮ナリ。九子ノ形ヲ異ニスルモモト一龍ノ產ナリ。故ニ駢中ニ散ナケレバ則チ氣雍リテ疏シ難ク、散中ニ駢ナケレバ則チ辭固ニシテ瘠セ易シ。兩者ハ只相成シ易ク偏廢スベカラズ。」と。

又曰「文ニ駢散アルハ木ノ枝幹アリ、草ノ花萼アルガ如ク、始メヨリ彼此ノ別ナシ。言フベキ所ノモノハ一ハ理ヲ以テ宗ト爲シ、一ハ辭ヲ以テ主トナスノミ。其レ理ハ辭ヲ備ラザルニ非ズ、辭モ亦理ヲ外ニスル能ハズ。而シテ偏勝ノ弊ハ途ニ兩岐ニ至ル。始メハ則チ土石同ジク生ジ、終ハ則チ氷炭相格ス。ソノ合シテ之ヲ一ニスルモノヲ求ムレバ其レ只通方之識、絶特之才ノ人ナルカ。」と。

劉開は四六を除くとは言はないが、孫德謙は四六と駢文とを區別しようとする。彼は文心雕龍に「四字密而不促、六字格而非緩」と言つてゐるが、此は必ずしも駢文を指して言ふのではない。何故ならば、若しさうならば何故に専ら駢體を論じてゐるのに麗辭篇に之を取らないか、と言ひ、又更に「四六ノ稱呼ハ唐ノ李商隱ニ起リ、六朝人ニハ文筆ノ名アリシノミ。」といふ點より四六の名を嫌ひ、名を嫌ふばかりでなく實質をも四六から遠ざけようとしてゐる様である。彼は又次の様に言ふ。

「六朝ノ文中四六ヲ以テ對ヲナスモノハ往々只四言ヲ用ヒ、或ハ四字五字ヲ以テ相雜ヘテ出ス。徐庾兩家ニ至リテハモトヨリ四六ノ語多ク、既ニ唐人ノ先ヲ開ク。只後世ノ駢文ノ全ク排偶ヲ取リ、遂ニ四六ノ格調ヲ成スガ如キニ非ザルナリ。」又曰「文章ノ體製ハ六朝時ニアリテハ只文筆ノ分アリ、且駢散ノ目ナシ。而ルニ世四六ヲ以テ駢文トナスハ卽チ之ヲ失ヘリ。」と。余は駢文の事象に對してはその歴史的に展開する姿を尋ねたいと思ふ。孫氏は一定の時期、又は或種形式のものを限つて此を駢文として膠着せしめ、理想をこゝに求めようとする。諸君は孫氏と私と立場に相違のある事を認識して聞いて戴きたい。

孫氏は六朝の碑誌を論じて、王儉・沈約等を推し、其他には庾信最も之に長ずとしてゐる。庾の文の形態を説いて、「ソノ一事ヲ敘スル毎ニ多ク單行ヲ用ヒ、先ヅ事略ヲ以テ説明シ、然ル後故實ヲ援引シテ聯語ヲ作製スルハコレ駢散兼ネ行フノ證トナスベシ。」と言ひ、自説を述べて、「ソレ駢文ノ中苟クモ散句ナクバ則チ意理明カナラズ。我思フニ駢體ヲ作爲スルハ等シクマサニ是ノ如クナルベシ。獨リ碑誌ヲ然リトナスノミニ非ザルナリ。」と言ひ、更に他文と比較して、「之ヲ喩フルニ、詩賦ヲ撰スルモノ往々作意ヲ標明シテ序ヲ前ニ列ス。序ヲ用フル所以ハ蓋シ序ハ散體ニシテ詩賦ノ本文ハ卽チ駢タリ。詩賦ノ文

ハ極メテ穠麗ナルモ序言ノソノ前ニ冠スルナクンバ、讀ミテ終篇ニ至ルモ遂ニソノ旨趣ノイヅクニアルヤヲ知ラズ。猶駢偶ノ文字、通體、屬對甚ダ至リ、其人ノ事實モ亦藻飾ニ從フガ如シ。將タ何ゾ博士買驢ノ誦ヲ免カレンヤ。病ノアル所ハ未ダ散ヲ駢ニ寓スルヲ知ラザルニ由ルナリ。」と。

此は散の助を借りて始めて駢の義が明かだとしてゐるのである。更に此を庾文に當てはめて論じて、「故ニ子山（庾信）ノ碑文ハ述ベテ行履ニ及ベバ之ヲ出スニ散ヲ以テシ、而シテ駢麗ノ句ハ其下ニ接ス。」といひ、又他の體に推及して、「之ヲ別種ノ體裁（碑誌以外ノ體）ニ推スニ又マサニ駢中ニ散アルベシ。是ノ如クナレバ則チ氣既ニ舒緩ナルモ平滯ニ傷ハレズ、而シテ辭義モ亦軒爽ナリ。」といふ。又他例を舉げて、

甲 天嘉六年修前代墓詔 陳宣帝（宣、文ノ誤カ）

若其經綸王業、縉紳民望、忠臣孝子、何世無才

孫評云 此散也

而零落邱山、變移陵谷、咸皆翦伐、莫不侵殘。玉林得於民間、漆簡傳於世載。無復五株之樹、罕見千年之表。

孫評云 則駢矣

乙 寄梁處士周弘讓書 王褒

頃年事逾盡、容髮衰謝。芸其黃矣、零落無時。還念生涯、繁憂總集。

孫評云 此散也

視陰愒日、猶趙孟之徂年。負杖行吟、同劉琨之積。慘河陽北臨、空思鞏縣。霸陵東望、還見長安。

駢文概說

孫評云 則駢矣

右の二文が共に前に散を出し次に駢を置いてゐるのを示して其後に「駢文ヲ爲ルモノハ但ダ泛ク事類ヲ填メ純ラ排批ヲ用ヒ文體宜シク爾ルベシトオモヒテ專ラ華艶ヲツトメ、散文ト別アリト謂フナクンバ庶クハヨク六朝ニ法トルモノナラン。」と言ひ、次には先づ駢を出して次に散を出した例を挙げ、

丙 遺崔嶺書 楊 暉

昔漢氏西京、梁王建國。平臺東苑、慕義如林。馬卿辭武騎之官、枚乘罷弘農之守。每覽史傳、嘗竊怪之。何乃脫略官榮、棲遯藩邸。以今望古、方知雅志、彼二子者、豈徒然哉。

之に對して「蓋シ又駢ヲ前ニ作り散ヲ後ニ居キテ以テ其義ヲ引伸スルモノナリ。」と言ひ、「之ヲ要スルニ駢散合一ハ駢文ノ正格トナス。モシ一篇ノ中始終散行ノ處ナキハコレ後世ノ書啓ノ體ナリ、與ニ駢文ヲ言フニ足ラズ、且所謂駢トハ但屬對ノ工麗ナルヲ謂フノミナラズ、モシ一句冗長ナラバマサニ化シテ兩句トナスベシ。或ハ兩句、尙單弱ナルヲ嫌ハバ、卽チ又宜シク分チテ四語トナスベシ。總テ體ヲ相テ裁スルヲ視ンノミ」というてゐる。

孫氏が「文には駢散なし」と言つて賈誼の過秦論の首段を擧げて、「此則ち駢散合一の理」と言ふのと、彼が或は駢體と四六と區別しようとするのとは同一思想に基いてゐる。彼の思想は駢散合一と稱してゐるがその實質は駢散兼行に過ぎない。余は駢文の理想を論ずるに當り散句偶句の兼行を説くのは末節に屬すると思ふ。散偶の兼行は要するに兩者を混用する事であり、散は散、偶は偶で毫も兩者の融和はない。要は偶句をなすものが往々典故又は工麗なる修飾につとめて全文の意義の貫徹を缺くことがあるから、之を缺かない事に存する。

此は直ちに詩篇の排律の場合を取つて比較して論ずる事が出来る。唐の杜子美が聲韻を排批し、大或は千言を以て千古に稱せられてゐる所以のものは、單に對句を多く作つたからではない。多くの對句が千殊萬態の變化を有しながら一貫した意義を有する爲である。散句を以て先づ事態を説明して偶句を作り、偶句窮すれば又散句を使ふといふ如き偶散の混合物ではない。若し排律に於けると同じ力量工夫を有するならば、駢文に於ても對句の構成、意義の貫徹を期し得るであらう。余は駢文に於て散句を兼用する必要のある事を認める。故に敢て駢文中に散句を禁止せよとは言はないが、散句を俟つて偶句の窮を救はうとするのは、その人がある程度まで古文家的の考によるので余の言ふ駢文の立場に居て進展を圖るものとは言へない。駢文は駢に長所がある。若し散處に於て長所を現はさうとするならば、此は散文を本體とするものでたまたま駢句を借りたに過ぎない。駢文が工整に傾くと俗體に墮落し、雄健、華麗、高雅等の趣を失ふに至るのは文體の罪ではなくして作者の罪である。作者の失を見て文體を罪する事なくば幸である。

駢散兼行を駢散合一と混同した思想を最も具體的に見せてゐるのはかの傳亮に對する孫氏の評論である。

爲宗公至洛陽謁五陵表

傳亮 李友

湄臣裕言。近振旅河澗、揚於西邁。將屆舊京、威懷司雍。河流過疾、道阻且長。加以伊洛榛蕪、津塗久廢。伐木通徑、淹引時月、始以今月十二日、次故洛水浮橋。山川無改、城闕爲墟。宮廟隳頽、鐘簾空列。觀宇之餘、鞠爲禾黍。廛里蕭條、雞犬罕音。感舊永懷、痛心在目。以其月十五日、奉謁五陵。墳塋幽淪、百年荒翳。天衢開泰、禮獲申。故老掩涕、三軍悽感。瞻拜之日、憤慨交集。行河南太守毛修之等、旣開翦荆棘、繕修毀垣。職司旣備、蕃衛如舊。伏惟聖懷、遠慕兼慰。不勝下情、謹遣傳詔殿中郎臣某奉表以聞。

——印 對偶をなす。——印 粗對をなす。

右の文に對して孫氏は「此ノ文ハ遂ニ散文ニ同ジク殆ド偶句ナシ。但ツヒニ駢文ヲ以テ之ヲ視ザルヲ得ズ。蓋シ駢文ニ貴シトスルモノハマサニソノ氣息ヲ玩味スベシ。故ニ六朝ノ時駢偶ヲ以テ長ヲ見ハスト雖モコレ等ノ文ニ於テ尤モ宜シク法ヲ取ルベシ。彼駢散ヲ以テ劃シテ兩途トナスモノハ蓋ゾ季友輩ノ撰スル所ヲモテ一ビ之ヲ讀マザルヤ。若シ斯ノ文ヲ以テ之ヲ散文中ニ入ルモソレ以テ異ルアルカ。」と論じてゐる。彼の此の論旨を極めると「此の文は形式上殆ど偶句はないがその氣息に於ては駢文である」と言つてゐるかの如く見える。果してさうであらうか。今少しく吟味してみよう。上文——を施した語句はすべて對偶をなし、——を施した語句は或は對し或は對せず、粗對である。それ以外にあつても四字句はいづれも駢文の性質を帯びてゐる。凡そ一句に於て一定の字數を限る事はそれ自身既に韻文の性質を帯びてゐる。他例で見ても

輕舟反溯、弔影獨留、白雲在天、龍門不見

（齊謝朓辭隨王牋）

暮春三月、江南草長、雜花生樹、羣鶯亂飛

（梁邱遲與陳伯之書）

甲帳珠簾、一朝零落、茂陵玉盤、宛出人間

（陳沈炯經通天臺奏漢武帝表）

此等は對句の方から見ると何等對偶はないが、その句は全く韻文的なものと同じである。孫氏が無意識的に感ずる氣息は其所から生ずる。傅亮文中の氣息はその實駢文的要件を具へてゐる結果である。孫氏の駢散を區別する標準は何處にあるか

疑はしい。孫氏の如き學者でさへさうであるから、我我は駢文の性質を明かにしなければ散・駢・四六の區別の標準はわからなくなるのである。注意せなければならぬ。(終)

予は昨年十月六日より十一月まで東京文理科大学漢文學科學生諸君のために「駢文概説」を講義す。今學生諸君より筆記成れりとして示さる。講義已に不備なりしに筆記も亦必しも予の意を盡くしたるものとおもはれず、但講義の要旨は實に大略此くの如し。閲讀一過、之を諸君の手に委ぬと云爾。——昭和十七年一月、鈴木虎雄誌す。